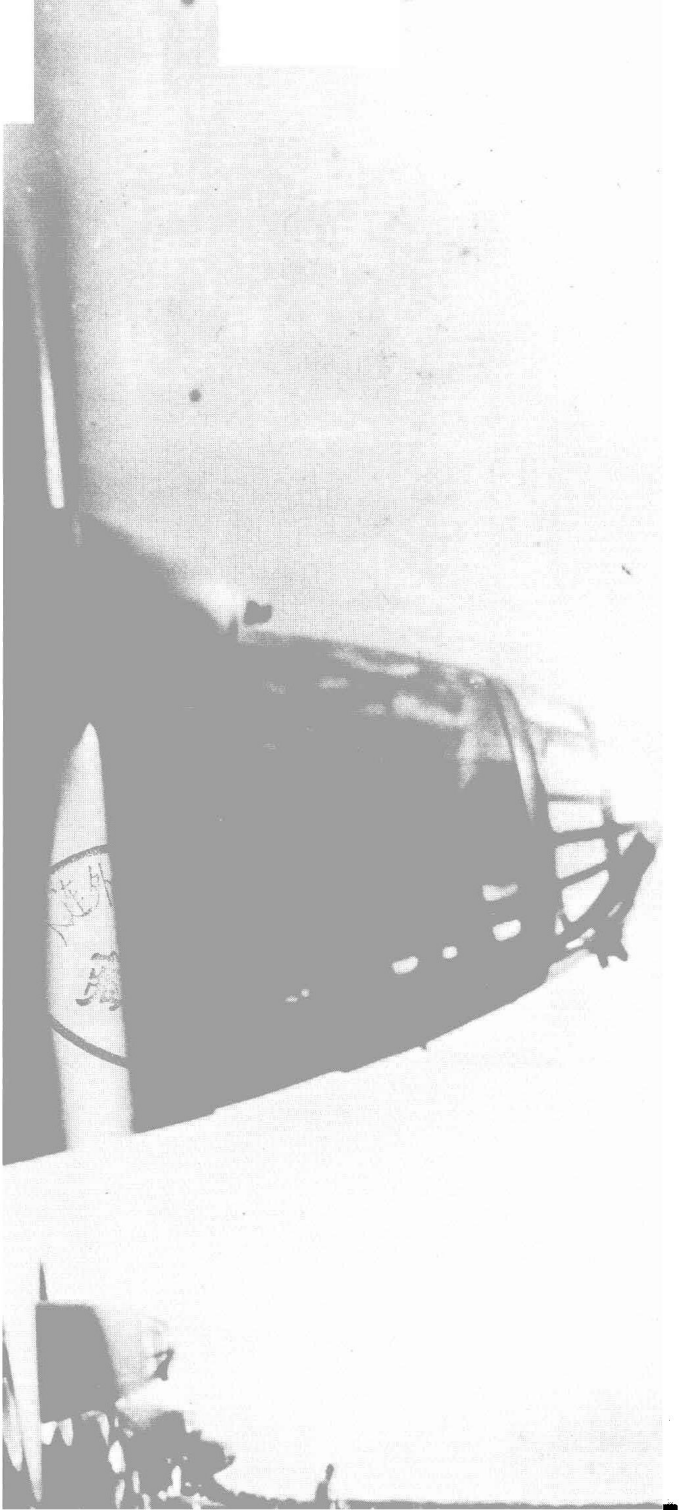
生命若く燃えて

陸軍少年飛行兵の記録

監修 少飛会

命若く燃えて

陸軍少年飛行兵の記録



陸軍少年飛行兵の記録

生命若く燃えて　0095-740003-2126

昭和四十九年十二月八日　第一刷　発行

監　修　少　飛　会

企画・編纂　社団法人・日本宗教放送協会出版局

編集人　岩淵春男

発行者　真坂良輔

発行所　コスモ出版株式会社

東京都新宿区四谷四―二八―八

（〒一六〇）

電話（三五二）五五六二番（代表）

振替口座・東京　一二二〇九一

禁・無断転載

印刷　特進印刷株式会社

製本　東京美術紙工

（乱丁・落丁はおとりかえ致します）

序にかえて

少飛会会長　清水秀治

高く晴れ上った秋空、ちぎれ雲が僅かに地平線に連なっている。その中を離陸したばかりのジャンボ・ジェット機が轟音を残しながら急上昇している。やがて、エンジンの音は次第に遠ざかり、細くなり、今や小さな黒点となった機影とともに青空の彼方に消え去ってゆく。

涯しない大空は、再び静けさをとりもどしすみ渡っている。全く変化のない大自然は、日本の平和を象徴しているかの如くである。

その大空を見上げつつ、ふと脳裏をかすめるものがある。

すでに三十数年を経過して、忘却の彼方に押しやっていた情景が眼前にありありと甦える。太平洋戦争のさ中、銀翼を連ねて大空一杯に羽ばたいていた荒鷲達の雄々しい姿が鮮烈に浮んでくる。意気旺んな若者達の歌声がひびいてくる。

エンジンの音　轟々と
隼は征く　雲の果て
翼に輝く　日の丸と

胸に描きし　若鷲の
印はわれらが戦闘機

そして、厳しく烈しかった、戦の日々が、つい先頃のことのように思い出されてくる。

勇ましい飛行服に純白のマフラー、飛行帽の中に若々しい眼が笑っている。年齢弱冠十七、八歳、若桜の如き少年達、その名を陸軍少年飛行兵という。命のままに、満洲、中国、南方地域等戦火のある所到らざるはなく、勇猛果敢に大空をかけめぐり、赫々たる戦果を誇り、その名声を全世界に轟かせたものであった。しかし、戦局の進展に伴い、その大半は、特別攻撃隊として比島に、沖縄にと若い生命を断ったのである。年幼いせいか、何らの迷いもなく、彼らの出撃はまことに淡淡としていたことが印象的に思い起される。再び還らざること恰も当然のように、ニッコリ笑って手を振りながら、我先にと敵艦に体当りしたのである。

今にして想えば、いまわしく、不幸な戦争であったが、純真無垢の少年達は祖国の不滅と民族の繁栄を願って、莞爾として悠久の大義に殉じたのである。若い彼等が最も愛したのは無限の大空であり、この大空に平和を打ち樹てることが無上のよろこびであったと思われる。

戦後の日本は幾多の辛酸を経たが、若い少年兵が命を賭けて願った大空の平和は完全に甦っている。

今回、社団法人日本宗教放送協会の編纂により、この陸軍少年飛行兵のありし日の姿、活躍ぶりの一端が世に送られることは、関係者として誠によろこびにたえない。歴史の谷間にうずめられた若者達の記録が後世に伝えられることを併せて希望する次第である。

殉国の英霊の御冥福を心から祈り、御遺族の御多幸を願って序にかえる。

（昭和49年12月）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

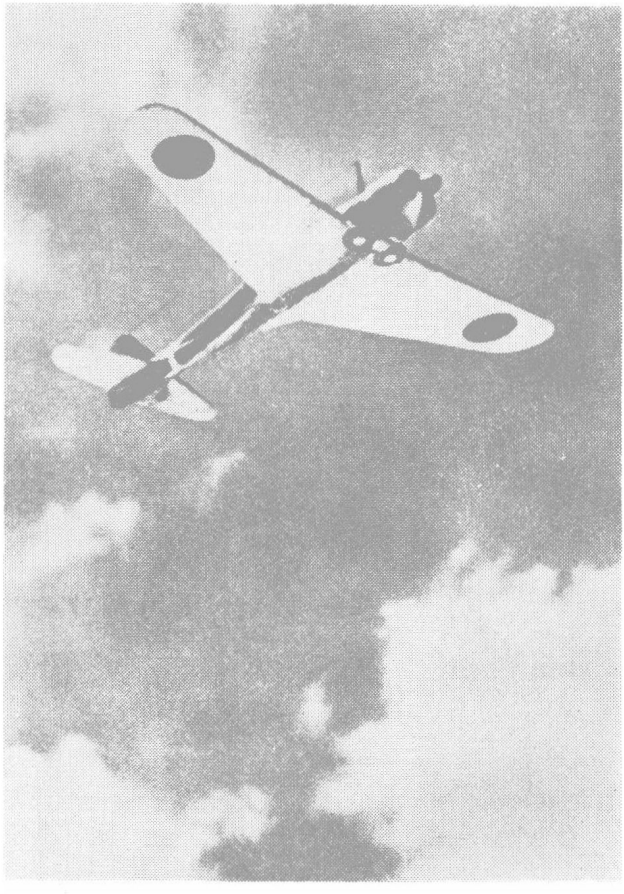
第一章　あゝ尽忠・大空の白虎隊　19
この若き英雄たち……20
第二章　あゝ陸軍戦闘機隊　37
五号機帰還せず……38
幻のグライダー部隊……55
ちぎれ雲の記……65
激戦！　大空に埋もれた青春……94
通称部隊名について……107
第三章　あゝ陸軍特別攻撃隊　111
特攻に散る若桜……112
特攻司偵振武桜隊……120
誠特別攻撃隊……126
あゝ壮絶！　金森少年飛行兵……132
陸軍特別攻撃隊振武第八十六隊顚末記……136

第四章　南十字星のもと、吾れここにあり　169
第五章　遙かなる雲の墓標（遺稿集）　195
第六章　貴様と俺の大陸日記　227
第七章　私のポケット戦記　263
第八章　少年飛行兵の歴史　279
少年飛行兵の誕生と育成……280
名機にまつわる私の想い出……293
第九章　空中勤務者参考綴　305
第十章　戯曲・最後の戦闘機　327

■写真提供　少飛会・靖国神社（映画君こそ次ぎの荒鷲だ）より

第一章

あゝ純忠・大空の白虎隊



この若き英雄たち

小飛4期　児玉敏光

歴史の流れの変動期にさいしては、いつの時代でも純真無垢な少年たちの目覚しい活躍と悲劇が裏面史に秘められていることは史実が明らかである。

戊辰の役において会津藩に殉じた少年白虎隊。西南の役では肥薩の戦野に勇戦して散った薩摩藩の少年振武隊。また第二次大戦の末期には首都ベルリンと運命を共にしたドイツの少年突撃隊。

戦後ではハンガリー動乱のおり爆弾を抱いてソ連戦車に体当りして果てた少年決死隊と彼らはいずれも十四歳から十八歳。花もつぼみの少年たちであった。

これら少年隊に共通した特色は、祖国の危急を救おうとして自主的に隊（決死隊）を結成して戦場に臨んでいることである。

その動機と行為行動は少年なるが故に単純であり血気に走り過ぎてはいたが、すべての点で純粋さに満ちあふれていた。

それだけに彼らは勇敢であり、強かった。

味方の敗色が決定的な段階に至ってもなおひるまず最後まで孤軍奮戦をつづけ、刀折れ矢つきて、はじめて死の道を選んでいる。

死に直面してもシバ笛を吹いたり、詩を吟じたり、或いは「お母さんを頼む」と言い遺し、従容自若として己の理想に殉じている。

この事実は年若い彼らが未来の可能性に燃やした一途な信念と純粋な情熱から生まれたものであるが、結果は悲劇となってその時代の終幕をいろどっているだけに、いっそう哀れさを感じさせるのである。

太平洋戦争の前半、連合艦隊、司令長官として全国民の信望と期待を一身に集めた名提督、山本五十六元帥も、「戦争で一番強く最も必要なのは二十歳前後の純真な若者たちである」と、若鷲たちの勇戦を讃えられたことがあった。

また一方「死なせやすかったのが少年航空兵だったかも知れない」と言って悩み苦しんだ教官（文官）もあったと聞く。

ともあれ少年の単純さと素直さとかけがえのない美しさが大空への悲願として燃えた「予科練と少年飛行兵」彼らもまた国家の危急に直面して、不惜身命ただただ報国の純忠を貫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

き、祖国の敗戦を肉弾特攻という痛恨無比の悲劇で自らの幕を閉じてしまった。

霞ガ浦湖畔にたちて

海軍飛行予科練習生を偲びてよめる。

海はらに　はたおほらに　散華せし
きみら声なく　いく春やへし

高松宮喜久子妃殿下

（元海軍飛行予科練習生の慰霊碑―霞ガ浦元海軍航空隊跡）

やすらかに　ねむれとそ思ふ　君の為
いのちささけし　ますらをのとも

皇后陛下

（元陸軍少年飛行兵の慰霊碑―立川市郊外元陸軍少年飛行兵学校跡）

いさきよく　風に散りにし　花のこと
御国のためと　たた進むらむ

北白川房子さん（元妃殿下）

（特攻平和観音―東京都世田谷区）

この三首の御歌はいずれも支那事変からノモンハン事件、さらに太平洋戦争と、大空の戦いに雄々しく出陣して祖国のため桜花よりもいさぎよく、美しく散った若鷲たちの純忠精神を讃えられ、そのみ魂を慰めるため、お詠みになられたもので、歌詩はそれぞれの碑に深く刻まれている。

日本の空を飛行機がはじめて飛んだのは明治四十三年十二月十九日であった。

この朝、徳川好敏（陸軍大尉）の操縦するアンリーファルマン機は代々木練兵場を埋めた数万の群集が見守るなかで、高度七十メートル、滞空、約三分の記録を樹立して静かに大地に舞いおりた。

徳川大尉は、とうじの感激を「寸時飛行、是天佑」と題した名文の手記で再現している。

あれからわずか半世紀の間に科学の進歩は鈍重なプロペラ機を軽快なジェット機に変え、さらにロケット機へと変貌を強いた。またそのロケットは人間衛星と手を結び宇宙開発の花形として登場。人類の永年の夢であった月面着陸も遂に実現した。

（昭和四十四年七月二十一日）

かかる時代にかつての海軍少年航空兵（海軍飛行予科練習生）と陸軍少年飛行兵を論ずることは、時代錯誤も甚々しいと簡単にかたづけられることであろう。またリバイバル・ブームの波にのって懐しのメロデーを口ずさむ者として一笑に付せられるかも知れない。

だが、私たちにとっては戦後二十五年を経た今日でも、なお過去の犠牲と悲惨の大きさを想起しないではいられないのである。現代が平和と自由に満ち、民主的だというならば、なおさらのことである。

私たちといえどもただ、たんに戦争の想い出を語れと言われたらご免こうむりたい。

しかし、この戦争で散華した彼らは国家の危急を信ずればこそあたら若い生命を投げだして軍人として最後まで立派に戦い、けなげにその任務を果したことは厳粛な事実である。

戦争は無謀であった。だが敗戦は少年航空兵たちの責任ではない。彼らは国家の至上命令のもと、ただ燃えさかる熱情、そして祖国と同胞を想う至純の魂がそうさせたのであって、私たちはいまこれら亡き僚友たちの内面の声に耳を傾け、現代に生きる喜びの意義をもういちど嚙みしめ、惨禍の記録を後世に残さねばと考えたからである。

戦後も四半世紀も過ぎ去った今日。世界中が世代の断絶という同じ問題をかかえている。日本でも戦後、世代の断絶はいっそう大きくなり複雑となっている。

去る日。心ない全共闘の学生たちの手により「わだつみの像」が破壊された。

平和と民主主義のシンボルであったこの像の破壊はその最も象徴的な事件といえよう。

この学生たちにとっては、戦争中の若者たちがいかに苦しみ、悩み死んでいったか—。そんなことは我々には関係ないと言うに違いない。

絶望と虚脱の終戦から数えて今年は三〇年。

現代は戦争のみじめさを知らぬ世代がふえ、二百七十万人もの尊い犠牲者（原爆犠牲も含む）を出した過去の教訓がいとも簡単に忘れ去られようとしている。

三〇年という歳月は人間の世界にとってはそれほどむごい長い歳月なのであろうか—。

忘れることは人間の暮しの知恵かも知れない。

だが、忘れることがらによっては重大な危機を引き起す可能性もある。

貴重な戦争体験も時の流れに洗い流されてしまっては、地球の平和を維持する力は次第に失われてゆくような気がしてならない。

したがって、この記録が世界平和の道標の一つともなれば、真の平和と後につづく者を信じて何のためらいもなく散った殉空の霊も安かに眠ってくれることと信じ、本稿の発表にふみきった次第である。

この不屈の闘魂をみよ

戦後、学徒兵の記録集がおびただしく公刊された。これらの記録は戦死した学徒兵の日記、手記、書簡などを題材にして編集されたものである。

それぞれの記録には、学生時代の燃えさかる夢やペンを捨て、愛する肉親や恋人とのきずなも断ち切って戦争という巨大な渦中にまきこまれながらも、彼らは平和と自由を絶叫してけなげに、そしてみじめに死んでいった。

彼らが短い人生に書き遺した血涙の手記は、私たちの肺腑

をえぐるものばかりである。

だが、この学徒兵たちとは対照的に将来、三軍を叱咤する将軍や参謀を夢にえがきながら、次代の国軍を担うという栄光と伝統のなかで育った陸軍士官学校（陸士）と海軍兵学校（海兵）出身者の記録は意外と少ない。それは彼らが職業軍人であり死ぬのがとうぜんだ、ということであったのだろうか——。

さらに不思議なことは純真紅顔の少年たちが、かってわが陸海空軍の主軸となり、或いは尖兵（せんぺい）となって勇戦死闘したいわゆる少年航空兵出身者に関する記録はあまり公刊されていない。

彼らも陸士、海兵出身者と同様、職業軍人であったという理由からであろうか——。

ともあれ、あのとうじ職業軍人とか非職業軍人の区別があっただろうか——。

未曾有の国難、そして日本民族の危機ということですべての若者たちが動員されたのではなかったか——。

すなわち大学生は海軍の予備学生か陸軍の予備士官に、旧制中学の高学年は陸士か海兵、あるいは海軍甲種予科練として、また低学年は陸軍の少年飛行兵か海軍の乙種予科練といったぐあいに日本全土（台湾、朝鮮をふくむ）の青少年たちは、それぞれの年令と学力に応じて戦士としての訓練をうけ前線に急いだのである。

いわば日本全青少年の総出陣であって日本国のすべての若者たちが戦場におもむく運命を担わされ、死と対決させられたのだから、とうじの若者という点ではこれを差別する理由は何一つないのである。

だが、これらの若者たちが残した遺書を出身別にまとめてみると、死生観はそれぞれ異っていることがよくわかる。

学徒兵の遺書には、戦争の意義、日本はどうして戦争をはじめなければならなかったのか。またこの戦争は日本に勝目があるのか。

なぜ自分はこの戦争で死なねばならないのか。などの疑問に深く苦しみ悩みながら、しかもこのことを肉親や国民に強く訴えて出陣している。これが陸士や海兵出身者となると、彼らは徹底した軍人精神を注入されているだけに死を平静にうけ入れ、淡々と悟りきった心境で戦場にのぞんでいる。

つぎに予科練と少年飛行兵出身者たちの遺書になると、大空にあこがれ、飛行機を誰よりも愛した幼い彼らは、何の疑いも抱かず、ただ、まっしぐらに栄光の死に向って突進している。

このことは、それまで社会的に純白無垢であった彼らが軍隊でうけた教育とも関係が多分にある。

彼らはいまの教育でいえば中学二、三年の年令でわが国軍に投じ「大義」「殉国」ということだけしか考えていなかった。

すなわち「国の大事であるから死なねばならぬ」という観念が、まったく無私なかたちで彼らの心を捉えていたのである。したがって死ぬるとか、生きるとかは全く度外視して国難に殉ずることを彼らは本気で考えていた。

そして精神と肉体の練磨をいかにして敵に勝つか——己に克つか——ということをこの一点に集中することによって己の理想に殉じようとしたのである。もちろん将来、軍の偉物になろうなどという邪心は彼らの心のなかには微塵もなかった。ただ、およばずながら諸外国の悪に対して一矢を報いてやらねばと決意し、その決意どおり行動したのである。それは一途に死の道であった。

すでにインキの色もうすらいでいる彼らの遺書をみると「国のため笑って散ります」「名誉の戦死は一家のほまれですから御両親、兄弟、喜んで下さい」「人生半額、いざ征かん」などといく度か遺族の涙をさそった稚ない文字が生々しく過去をよみがえらせてくれる。

このように若者たちの遺書に綴られた死生観は出身別によって異ってはいるが、すべての遺書は愛国の至情で貫ぬかれている。

「私は死ぬ。だが、ご両親様、妻子、兄弟、妹姉、そして恋人よ、長生きして幸わせに暮して下さい」という人間至上の殉愛精神が文字のなかに満ちあふれているのである。

すなわち彼らのすべては後につづく者を信じ、肉親を愛し、国を愛し、日本人を愛し、愛するもののために死んでいったのである。

だが、二十歳前（戦争末期に巣立った若鷲たち）後の予科練や少年飛行兵出身者たちには妻子はもちろん愛する異性の何たるかも知らずに死んでいる。

年頃からして情熱たぎる若い彼らに、たとえ恋人がいたとしても、それは何も不思議なことではない。しかし敵撃滅の信念にこりかたまった彼らには、そのような余裕はなかった。

また戦局の急激な悪化がそれを許さなかったのであろう。

このことは知覧飛行場から飛びたった、「陸軍特攻天剣隊」の一人、少年飛行兵第十五期生の椿伍長（当時十九歳）がいよいよ明朝、沖縄の敵艦船群を目指して出撃する前夜にしたためた、つぎの手記によくあらわれている。

「いよいよ食事もあと一回だけとなった。明日の朝の食事はよく味ってみよう。故郷に最後の手紙も書いた。もういまとなってはやり残したことはない。だが心の隅ではなにか重大なことを残しているような気がしてならなかった。

私は今まで異性の愛は母の愛しか知らなかったのである。女性の愛というものはいったいどのようなものであったのか——そして戦友たちは女性に対してどんな気持でいるのだろうか——皆んな俺と同じ気持なのであろうか——と考えていると、私の右どなりに寝ていた同期の羽立伍長が小さな声で私に話しかけてきた。とても黙ってはいられなかったのだろ

う。

「おい俺たちは死ぬんだな――」と羽立は言った。その時、私は返事のしようがなかった。「なんとなく変な感じだなあ――俺たちはなんのためにこの世に生まれてきたんだろうか――」

羽立の言葉は私の心の中とそっくりだったが、いまとなってはどうすることもできない。

しばらく沈黙がつづいた。

やがて羽立は「なあ――おい貴様、女っていうものを知っているか」

「俺はほんとの女というものを知らないのだ。たった一度だけでよい。死ぬ前に女を愛してみたかった。どちらでもよい。ただ俺は女を知りたかった。結婚せんと一人前でないことを俺は聞いたことがあるが、そうすると俺たちは半人前でこの世からおさらばということだ。それだけが俺は心残りだ。あまり俺たちは真面目すぎたんだなあ――。貴様はどう思うんだ。貴様は女を知っているか」と。

「俺も知らないんだ」と私は答えた。

「そうか、貴様も知らないんか」と言って彼はだまりこんでしまった。

戦友も知らないという返事に彼はいくらか安心したのかも知れない。

「いまさら知ったって仕方のないことだよ」と彼に言うと「そうだろうか」と羽立は私の言葉に同意しなかった。

このように純真にして無垢な彼らは世の中のことを深く知らないまま、教えられた栄光の死に向って直進している。

だが、彼らも人の子であり、しかも多感な青春期でもある。しかも死を明日に約束されていただけに人生に対するある種の疑念に悩み苦しんだことは事実であったろう。

明日は南海の空に砕け散る、同じ運命の若い二人の間で無気味な沈黙を破って、期せずしてこのような会話がかわされたことは、むしろ、戦争の非情さを如実にわれわれに伝えてくれる。

また、愛国の至情に燃え、女子挺身隊員を血書志願した純潔の乙女たちが同じ知覧特攻基地の回想録〝防空壕の中の恋〟―浪速書房発行―にも彼らの純忠ぶりが明記されている。

死を前にした特攻隊員の生活でもいろいろありました。一番明るくて元気なのは少年飛行兵出身の伍長とか軍曹とかの下士官で、年も十七歳か十八歳でした。

彼らはお国のために死ぬことを自分たちの義務と考えているので迷いというものはまるでありませんでした。

出撃前夜でも彼らは町に飲みに出たり、町の宿屋へ女を抱きにいったりはしませんでした。

夜になると、みんなが集ってお酒を飲み、大声でもって勇しい歌を唄っていました。（藤村とみさん）

出撃する少年兵たちのひとみは、みんな澄みきっていまし

「ただいまより攻撃に出発します」

た。しかも出撃する機上でニッコリ笑い、出発すると全機ふたたび、決して基地にはもどってきませんでした。

ところが桜の咲くころ、学徒出身の兵隊さんたちがたくさんこの基地にやってくると、そうはいかなくなりました。

十機、飛びたつと、きまって五機か六機はもどってくるのです。

悲しみを一つも顔にあらわさず、大声で軍歌を唄って大空に散っていった少年兵たちは基地のすべての人たちから愛されていました。もちろん、私たち乙女の憧がれの的でした。

だが、この基地も、急に人間くさくなり、悲しみや迷い、裏切りなどの渦が絶対支配の鉄の規律の中にもまざってきたのは、少年兵のかわりに学徒兵が多数この基地に来てからのことでした。（吉村梨枝さん）

学徒兵の隊員たちは桜の咲く前にやって来た少年兵たちのように純一無雑な心境で死に向ってゆくという気慨はあまり見られませんでした。（合川美代子さん）

死の出撃を明日にひかえた少年兵の菅伍長に「親兄弟の方に会いたくありませんか――」と聞くと、伍長はとたんに泣きだしそうな顔になったが、

「いや、自分はお国のために捧げた生命でありますから会いたくありません」と答えた。（友田アツ子さん）

このように列国の闘魂ひとすじに燃えたぎった、若くたくましい少年航空兵たちは、いずれも精強無比の戦士としてわが空軍戦力の中核として、敗色の濃くなった戦争末期におよんでも決してひるむことを知らず、まるで火に油をそそぐ勢で敵撃滅のため全力をふりしぼって戦った。

十五、六歳のころから大空の厳しい修練に耐え抜いてきた彼らは、それだけに心技ともに抜群の実力を備えていた。（おおむね年功順に）したがって実戦必勝を身上とする実施部隊ではこれら少年航空兵出身者たちに対しては無条件の信頼を寄せていたのである。

支那事変も一周年を迎えた昭和十二年七月、中支戦線では世界の航空戦史に一ページを記録する大事件が起きた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com